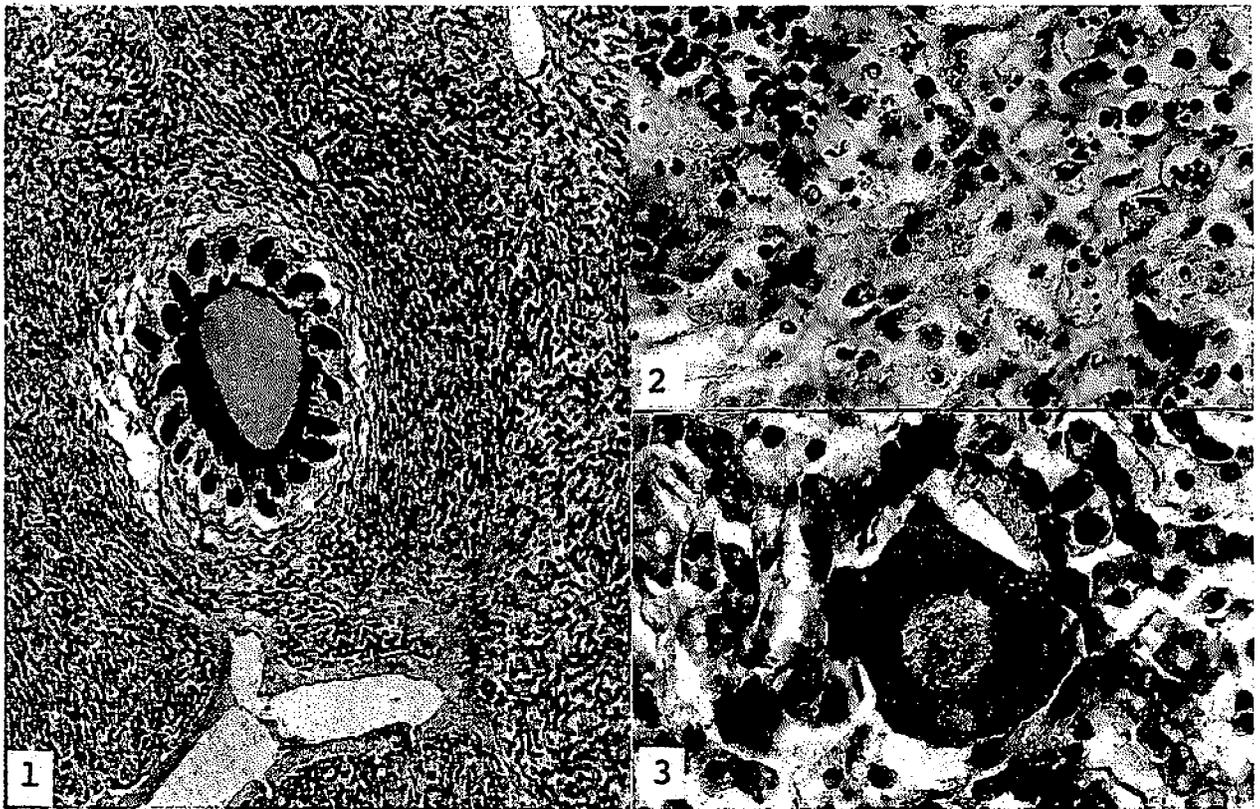


サルにおける Hepatocystosis の肝病変

帯広畜産大学家畜病理学教室出題 第16回獣医病理学研修会標本 No.241



1975年7月19日に実験動物用として40頭のカニクイサルがマレーシアから空輸されてきた。到着時に異常を認めなかったが、数時間後のトラック輸送で目的地に着いた時、そのうちの3～4才の雌1頭が斃死体となって発見された。

肉眼的には全身性の高度の鬱血、脾における数個の陈旧梗塞病巣を認めたほか、肝では包膜下に粟粒大の灰白色限局巣が密発して霜降り状を示し、同様の病巣は実質内にも認められた。

肉眼で認められた肝の病巣を組織学的に見ると、1)周囲に偽足様の長い突起を多数出した直径約1mm前後の球状体で、中心部にエオジンに淡染する液状物を入れ、周辺に行くに従ってヘマトキシリンに濃染する微小顆粒を密に入れた嚢胞様物(Fig. 1), 2)これらの破裂による内容の放出と周囲実質細胞の崩壊ならびに宿主側の強い細胞反応, 3)さらに結合織性癒痕病巣を示していた。宿主側の反応としては破裂以前では少数のリンパ球、形質細胞および巨細胞を混じた大単核球がこれを囲み、周囲の肝実質は圧迫萎縮に陥るに過ぎない。また、破裂は1側に起り、同時に多数の多形核白血球、大単核球が出現し、且つ微小顆粒状内容物を貪食したものも認められ(Fig. 2), その他巨細胞やリンパ球が残存した硝子様

の外膜を囲んでいた。最終的にはリンパ球、担鉄細胞および大単核球を含む不規則な癒痕組織として認められた。

一方、以上の粗大病巣の他に肝細胞内に微小顆粒物、さらに胞体および核の増大を伴った肝細胞の中に微小顆粒物よりなる小球状物を1個、稀に2個容れたものが散見された(Fig. 3)。

これらの形態学的特徴から、この嚢胞状のものはHepatocystosisのmerocystと考えられる。この原虫は分類上Leucocytozoon, Haemoproteus, Plasmodiumと極めて近い関係にあり、元来アフリカの下等なサル類に極くありふれたものとして知られ、アジアでもインドネシア、マレーシア、タイ、ラオス、台湾その他でサル類についての少数の報告がある。このmerocystは未熟または成熟merozoiteを多数入れ、周囲に指状の短い突起を出しているのが一つの特徴とされているが、時折り梁柱状の突起を示すと言う。このmerocystは普通1個の肝に1～10個に留まり、病原性は殆どないとされているが、本例の如く霜降り状を示すような多発例は極めて稀な症例と言えよう。本例は他に細菌あるいはウイルス感染を裏づける病変を欠き、長途の輸送といった悪条件と重なって、この原虫が死因として大きな意義をもつものと考えられる。(Fig. 1×40, Figs. 2 & 3×400)